

故平田清明教授を悼む

清水 嘉治

去る三月一日、午後三時頃、わたくしは所用のため神奈川県庁近くの事務所で、長洲知事の補佐役にあたる蔵隆司さんと打合せをしたあと、蔵さんから「平田さんが病気で死亡しました」ときき、それは本当ですかと聞き返しました。「いや、本当です」「宮崎義一さんから県庁に電話が入りました」という。本当に驚きでした。あの元氣旺盛な平田さんが、どうしてこんなに早く逝ってしまったのか、自問して蔵さんと別れました。

三月七日午前十一時、東京都品川区の五反田の安楽寺別院での告別式に参列しました。もちろん、この間、わたくしは、神奈川大学の学長室からの連絡、京都大学の八木さん、中央大学の山中さんから電話連絡をうけました。

三月七日の平田さんの告別式には、本学から管野敏雄理事長、青木宗也副理事長、山火正則法学部長をはじめとして、有志が参列しました。一方、経済学関係学会からも、伊東光晴氏が葬儀委員長を務め、都留重人先生、宮崎義一氏、水田洋氏、宮崎犀一氏、山中隆次氏など平田さんを悼む多数の研究者が参列しました。

平田さんは幸せな方だと思いました。社会科学上、もっともポレミックに問題を提起し、独自の「個性」に満ち溢れた「市民社会」的経済思想のひとつの体系をものにしたわが国の社会科学の第一人者でしたといっていよいでありましょう。平田さんとお別れは、市民社会観について違った意見をもつわたくしにとっても、痛恨の念で一杯であり

ます。

一九九三年三月末に、平田さんが神奈川大学を定年退職するに当って、経済学会は「平田教授退職記念号」を準備し、有志の教員が論文を準備していました。わたくしも、「平田先生よ、豊かな新しい人生を」という励ましの文章を提出しました。ところが、平田さんは、ある教授を介して「鹿児島経済大学の学長に赴任するので遠慮したい」という返事をしてきたというのです。

このとき、わたくしは、平田さんは、「現役として、もっとやりたいことがあるので、神大の定年退職記念号を遠慮したい」といつてきたのだと思いました。

わたくしは、平田さんが神奈川大学を定年で辞めるとき、平田さんに、「ゆっくりと著述活動に専念してほしい」といったつもりです。ところがきいてくれませんでした。鹿児島経済大学の学長になることもきいていませんでした。にもかかわらず平田さんは、万年現役の道をえらんだように思います。

ここで、神奈川大学で、七年間一緒に仕事をしてきたひとりとして、平田さんを悼む言葉を書きたいと思います。

平田清明教授は、一九九三年三月三十一日をもって本学を定年退職いたしました。教授が本学経済学部に着任したのは、一九八六年四月でした。京都大学経済学部を定年退職し、本学経済学部で経済学史を担当し、七年間その研究と教育に当たってきました。

平田教授は、たえず旺盛な研究意欲と研究の開拓心をもって七年間をすごしました。教授は、本学に赴任するまえに、すでにフランスの古典経済学者F・ケネー研究や資本論研究に秀れた業績をあげてきました。『経済科学の創造』

(一九六五年、岩波書店)、『経済学と歴史認識』(一九七一年、岩波書店)、『経済学批判への方法叙説』(一九八三年、岩波書店)などは、それぞれの専門領域の研究者の間で、注目され、評価されました。もちろん、『資本論』のユニークな解析を試みました『コンメンタール「資本」』全五巻(一九七〇—七三年、日本評論社)も注目を集めました。その他の業績をみましても、陸続として貴重な作品を発表してきました。私たち後輩の研究者に対して、かなりの知的刺激を与えました。同時に教授の論調に対しましては、たえず賛否両論の渦をまきおこしました。

個人的なことを申し上げますが、一九七〇年正月だったと思います。一橋大学名誉教授の故高島善哉先生宅のOBゼミの研究懇談会で、平田教授は、当時、学生や若者に多大な知的インパクトを与えた『市民社会と社会主義』(一九六九年一〇月、岩波書店)について報告しました。そのとき、私たちの質問に真剣に答えたことを想い出しました。「個体的所有論」「個々人の自由を基礎にした市民社会論」「自由人の連合としての社会主義論」など活発な議論が続きました。この会でも、教授はヘーゲルとマルクスの精力的な解釈をしていました。「市民社会の国家への揚棄を企図したヘーゲルと、国家の市民社会の再吸収による国家と市民社会との分裂の揚棄を展望したマルクスとの関係に関する思想的理論問題」を示しつつ重層構造としての市民社会と国家を考えていたように思われます。先生独自の「造語」を示しながら自己展開していくパフォーマンスは見事でありました。

わたくし自身は、ヘーゲルの『法哲学』二八九節一で市民社会と国家の関係を述べた点に注目していました。「市民社会は、万人に対して万人の利益が対立する場であり、これら二つのものが一緒になって、国家のより高次な見地と指示とに衝突する場である」という中味の解釈の問題をどのように現代的に把握し、ヘーゲルの限界を突くかを考えていました。ところが、平田教授は、こうした対立と衝突の場であることによって市民社会は、人倫としての「陶冶」をうける「教養(ビルドゥング)」の圏域であり、『政治的国家』へと発展を遂げるべき地平なのであった」というので

す。そして、こうした位置づけを担うものであるからこそ、「市民社会の創造は現代世界に属する」ことなのであると主張していました。この点もユニークな受け止め方ではないかと思いました。さらに、市民生活、地域とのかかわりも考えるべきではないかと思ったりしました。

教授は、一方で、F・ケネーの経済学とマルクス『資本論』に内在しつつ、他方で現代の資本主義を解析しつつ、独自の市民社会論を展開したということができましよう。

本学に赴任してからも、次ぎ次ぎと作品をものにしました。一九八四年四月から八五年一〇月までに就任しましたパリ大学（第七および第三）の客員教授の期間にまとめました異色な評論集であります『自由時間へのプレリュード』、『異文化のインターフェイス』（一九八七年、いずれも世界書院）を公刊しましたし、さらに共著として『現代市民社会の旋回』（一九八七年、昭和堂）、『ケネー経済表』（一九九〇年、岩波書店）を公刊しました。いずれもポレミックな作品でありました。こうした作品は、いまの学生に本当に読まれるかと心配もしました。

教授の著作活動は、現実に対する鋭い自己認識と社会科学の古典との総合的把握をめざしたものでした。一九八九年から九二年末までに書いた論稿、評論を集大成しました『市民社会とレギュラシオン』（一九九三年九月、岩波書店）は、マルクス経済学者や学史専門家の間にひとつの問題提起をいたしました。

この作品の問題意識的エスプリは、「はしがき」に凝縮されていますので、その中味の一部を紹介しておきたいと思っています。

「二〇世紀は終わった」。何をもって二〇世紀を定義するにせよ、その終わりを語るものは、終わりと彼が断ずる以前において自分自身が何を語り何を行なったか、そして何を行なわず何を言わなかったか、を問わねばなるまい。二〇世紀の光と闇は紙一重であり、一個同一の表裏である。虚偽と真実、希望と幻滅、栄光と悲劇のないま

ぜになった、今ではグロテスクというほかない時代を、自分はいかに生きてきたのか。

この奇怪な時間において、自分は何ものかへの加害者ではなかったのか。逆に被害者と自らを信ずるものは、どのような時代的文脈において誰を加害者として告発すべきなのか。また、“ことなかれ”を処世の術とし安全地帯に自らを韜晦させてきた者はその無責任を、果たして誰に向かって誇りうるか。

このような問いを自らに向かって発せねばならぬのは、職業政治家や経済戦略家、マスコミ関係者や職業文筆者だけではありえない。象牙の塔の寄食者こそ真つ先に自他双方から問わねばならないであろう。

いま二〇世紀は終わる。私たちはいま狭間にたつ。その足元を二一世紀がすでに揺がしている。

『社会主義』Ⅱ『国有』という「所有」の虚偽が殲滅され、国境と「壁」という人為の障碍を打破して人々は今、自由な『交通』を回復した。人権と市民権を獲得しつつ全世界のヒト・モノ・サービスを自由交換する国際的な『市民社会』がグローバルな規模で——しかも地域による多様性をともなう——その姿を現わしつつある。と同時に、そのことによって、一元化していく軍事ヘゲモニーと市場メカニズム、三極化する巨大経済圏、流血を辞さぬエスニシティ、人類の存否を問うエコロジーとジェンダー等々のプロブレマティークが、すべての人々の身体にふりかかっている。」

少し永くなりましたが、教授の独自の現代への自己エスプリが如実に出ています。『市民社会とレギュラシオン』には、著者の旺盛な問題意識のエスプリの中に、激動きわまりない世界の現実に対する厳しい自己認識と問題展開の華麗な社会科学的美学があります。わたくしは、『市民社会とレギュラシオン』に酔ってはならないと思います。そこには、社会科学研究者への、おそらく自分を含めてであろうと思いますが、厳粛な問いかけがあると考えます。それは、第一部「国民国家・エスニシティ・地域統合」の中にも、第二部「レギュラシオン・アプローチの射程」にも、第三

部「現代における市民社会と国家」にも豊富に叙述されています。

本学での在職七年間での研究成果は、きわめて大きかったといわなければなりません。もちろん、わたくしの専門領域と違って、この作品は、一面で、共通性、他面で、異質性を与えてくれます。「市民社会」の範疇についても、現実分析の中で位置づけるわたくしと、ヘーゲル、ケネー、スミス、マルクス、グラムシの各学説解析の中で、「市民社会」を構想しています平田教授との違いを改めて認識せざるをえません。だからこそ、社会科学研究の無限の究明の楽しさと厳しさがあるのかもしれません。

ともあれ、在職七年間の平田教授の業績に学ばされることがきわめて大でありました。一言でいえば、教授は市民社会学研究の個性的達人でありました。

平田教授は、この七年間に、本学の教育行政の仕事にも従事されていきました。大学院研究科委員長や副学長の仕事をしてきました。とくに、文部省の大学設置基準の改訂に伴う大学改革の仕事にも精力的に没頭しました。先生は、半ば、先頭に立って大学、学部の自己評価、カリキュラム改革などに熱心でありました。こうした課題は、本来、大学人ひとりひとりの課題であり、下からの時間をかけての取り組みを必要としています。この点、本学のさまざまな研究、教育の歴史条件の中で、教授は、大学の自己評価、自己点検について、上からの独自の問題提起をしました。この点、各学部間の受け取め方の相違に出会って、平田教授は苦労の連続だったのではないのでしょうか。

平田教授は神大の副学長として、無理を自覚して本当によく頑張りました。いや頑張りがすぎたといってよいでしょう。

いまわたくしは、大学の自己点検にあたって、ひとりが十歩前進するよりは、十人が一歩前進することではないかと肝に銘じています。

平田教授、安らかに眠って下さい。平田教授の学会における、社会における、独自の「市民社会観」は、さまざまなクリテークを受けつつも注目すべき大きな業績でした。私たち残った者は、平田教授の学問の業績を踏えて、自主的に前進したいと思います。

一九九五年三月十七日

経済学部長 清水 嘉 治